

9) シキミ = 榊(柘)

シキミはシキミ科の常緑小高木で太平洋岸では宮城県以南、日本海岸では福井県以南から沖縄、および朝鮮半島南部などに分布する。葉は革質で互生し光沢があり、3~4月頃、淡黄緑色の小さい花を葉腋につける。全木に芳香があつて、果実には毒がある。世界には約40種類が、ヒマラヤ、東アジア、東南アジア、北アメリカ、中央アメリカなどに分布する。和名の起りは有毒の実が成るところから「悪しき実」がシキミになったという。種子には『ハナノミン』という有毒物質を含み、牛馬の駆虫剤として、また寄生虫の駆除などにも用いるが、量を間違えると死ぬほどに強い毒性を持っている。また全木に『アニザチン』という有毒物質も含まれている。学名は『*Illicium religiosum*』で、属名は引き寄せる、種小辞は宗教的などという意味である。イギリスでは『Japanese anise tree』で、同属の茴香(ウイキョウ)の果実は欧米では『star anise』と呼ばれており、こちらの方は香辛料として珍重されている。

シキミは生命力が非常に強く、生枝を花瓶に挿しておいても1カ月ぐらいは生き生きと生きている。昔から葬式の花として最も普通に使われ、単にハナノキともホトケバナとも、枝葉を切ると香りが漂うことからコウノキ、コウノハナともいわれた。漢字では『榊』と記すのもこのためである。山取りしたものは花屋で売られており、絶滅した地方も少なくない。神社や墓地などに植えられ、葉や樹皮は線香や抹香の原料にもされているが、庭園や自邸に植えることは疎んじられた。材には粘りがあり緻密なために、細工ものや砂糖の樽材、数珠などに用いられる。

『万葉集』には1首があり、『之伎美』という文字が当てられている。

奥山の之伎美が花の名のごとや しくしく君に恋ひわたりなむ
歌の意味は「榊の花のようにしきりに君のことが恋しい」というものである。

平安時代には栄え木として、榊と榊の区分けはほとんどなかったようで、ともに神前に供えられる神事用の常磐木であった。しかし鎌倉時代になると榊が神に供える木として神事に用いられたのに対して、シキミは香りが強いために棺の中に入れられることも多く『花柴』とか『花榊』とも呼ばれ、仏事や葬式などには欠かすことのできない木として、珍重されてきた。このため京都の愛宕神社ではシキミを御神木にしており、愛知県の北設楽郡などでは門松にシキミを用いる地方も残っている。また死者が出ると『一本花』と称して、枕元にシキミの花を供える風もある。死に水をとる際にもシキミの葉に水をつけてとることも多い。特に新しい墓を作るとシキミを近くに植えて、害獣や害虫の被害を防ぐ地方もあり、墓に植えたシキミが元気に成長する姿を、冥界に行った死者が幸せで見なした。

シキミは民間療法にもよく用いられ、イボや眼病にはシキミを浸した水を患部につけ、船酔いには木の葉を臍の上に乗せておくとよいとされていた。シキミで天秤棒を作ると肩が痛まないとか、蒲団の下にシキミを入れて寝ると病が直るともいわれた。



シキミの花 (さいたま市浦和区)。京都の水尾では『水尾女』(ミズオメ)が、赤い前掛けを着けて、愛宕神社の参拝客にシキミの小枝を販売している(03-03-10 ハンノキの項参照)。



猛毒のシキミの果実(さいたま市浦和区)。

[目次に戻る](#)